

第3報告

学生による社会調査の現状と課題

— 置戸町「フィールドワーク」について —

Current Trends and Issues of the Social Research Performed by Students

— On the Case of Fieldwork at Okedo-cho —

木戸 功

人文学部人間科学科の木戸でございます。人文学部人間科学科のほうでおこなっている、現在は「フィールドワーク」という名称になっていますが、社会調査の実習科目のことをお話しさせていただきます。

・担当者の専門領域と関心

最初にくいつか、私自身のことをお話ししておく、家族社会学が専門です。実証的、経験的な研究をずっとやってきましたが、このあとに報告をされる高田洋先生との関係で言うと、私は社会調査法のなかでも質的調査法が専門です。ですので、質的調査に基づく経験的研究というのが普段自分でおこなっている調査研究になります。具体的には参与観察とか、半構造化面接法ですとか、あとはエスノグラフィックなフィールドワーク、生活史収集など、そういった研究が中心です。計量分析等は基本的には出来ません。

それから、家族研究が専門です。北海道に来て10年ほど経ちますが、それまではほとんど特定の地域社会を焦点化したような研究を自分ではしたことがありませんでした。連れていかれたことはあるのですが、自分で設計して実施するということは、ほとんどしたことがありませんでした。ですので、こちらに移ってきてから、いろいろな先生に教えてい

ただきながら、ノウハウを見よう見まねで身に付け、現在に至るというような、そういう経歴を持っています。

今日ははじめのほうで、人間科学科がおこなっている「フィールドワーク」について、ざっとふりかえりつつ、特にこの科目のカリキュラム上の位置づけ等々についての話をさせていただきます。そのうえで、大学が連携協定を結んでいる置戸町を対象にした学生の調査実習を2013年度から実施しておりますので、その経過と現状、そして課題などについて中心にお話をしたいと思います。

・はじめに

人文学部人間科学科における「フィールドワーク」という科目ですが、人文学部が開設されたのは1977年だとお聞きしていますが、1977年に人間科学科が出来て、最初の学生が3年生になる1979年から、当時は何て言ったのか科目名はちょっとわかりませんが、おそらく、「社会調査実習」と言ったのではないかと思いますが、現在ある「フィールドワーク」に連なってくるような調査実習系の科目

が開講されています。当時、例えば布施晶子先生や酒井恵真先生、そういった先生方が開設当初からおられましたので、そういった先生方を中心にして、基本的に人間科学科の社会学系教員が全員参加して、学生を現地調査に連れていくような、そういう科目だったと聞いています。

これまでどんなところに行ってきたのか、ということをごっとまとめてみると以下のようになります。

1979年～1985年：「地域の産業・経済・社会構造の変動と住民諸階層の労働・生活の基礎構造」（湧別町，上湧別町，遠軽町）

1986年～1989年：「ME技術革新下における農村工業の展開と住民諸階層の労働・生活の変容」（長野県丸子町）

1990年～1992年：「地域住民の定住と移動」（湧別町，上湧別町，遠軽町の追跡調査）

1993年～1996年：「高齢者の社会関係に関する実証的研究」（北村町，札幌市，神恵内村，歌志内市）

1997年～1999年：「地球環境問題と植樹運動」（標津町，別海町，厚岸町）

2000年～2003年：「北海道における町づくり・地域づくりに関する調査研究——空知支庁管内を中心に——」（栗山町，美唄市，夕張市）

2004年～2005年：「札幌市における『市民自治』構想と住民自治組織の再編」（札幌市）

2006年：「北海道の商店街の再生を考える——新たな集いと交流——」（札幌市白石区，室蘭市輪西）

2007年～2008年：室蘭市輪西の調査を継続／商店街（2007）高齢者（2008）

2009年～2012年：「北海道のまちづくり」（夕張市，北竜町，美唄市，美唄市）

2013年～2015年：「置戸町でのフィールドワーク」；『ものづくり・ひとづくり・まちづくり：オケクラフトを通じて』（2014報

告書），『移住と地域社会：オケクラフト移住生産者に着目して』（2015報告書）

一時は長野県の丸子町というところにも行かれていたようですが（1986年～1989年），基本的には北海道内で調査実習を実施してきました。基本的には外に出て行って合宿形式で実施していた，と聞いています。私が着任したのは2005年ですが，アンダーラインをひいたところが，私が関わった実習になります。

2005年から関わってきましたが，その年は「札幌市における市民自治構想と住民自治組織の再編」というテーマで，前年度から2年間の予定で，大学から札幌市内に学生が調査に通うという形式で実施されていました。酒井恵真先生が中心に担当されていました。

2006年は白石区と室蘭市となっていますが，そこで商店街の再生を考えるというテーマで，この年は内田司先生を中心に湯本誠先生，木戸の3人で実施しました。そこでたまたま，室蘭の「輪西」というところがなかなか面白そうだということがわかって，翌年2007年から2年間そこをフィールドとして調査を実施しました。

その後は調査地の選定に際しては，それほど明確な方針があったわけではなく，2009年くらいからは教員については，2人体制でということになって，どちらかが主担当になって全部設営するという，というそういう持ち方になっていきました。そしてその後は，夕張市，北竜町，美唄市といったところを調査対象地としてきました。

ご退職された先生などのお話をお聞きしても，元々はかなりハードな調査実習だったようです。担当教員の側の関心に沿って調査を実施し，学生はいはば調査員のような感じで参加するというような，そういう，昔からあるような古き良き社会学の調査実習という感じだったようです。ただ，2009年あたりから，なかなかそうもいなくなってきた，テーマ

設定自体もより緩やかに「北海道のまちづくり」といういくぶん柔らかいものにして、面白そうなところに学生を連れて行くというような性格に変わってきたと感じています。

私自身がゼロから対象地を選定して交渉をして、実施をしたというのは美唄市(2011年)が初めてでした。その時は、ご当地グルメ、いわゆるB級グルメに着目して、焼き鳥やとり飯などが有名ですが、美唄市がいくつかそういうものを持っていたので、そうした食を媒介とした地域のなかでの人間関係の繋がりたいなもの、そういったものを学生が調査をする、そのような設定で調査を行いました。湯本先生もご担当でしたが、その翌年にまた美唄市が選ばれて調査がなされました。その次の2013年からまた私に担当が回ってくるということになって、それで、はてどうしようかなというふうに思っていたところ、現在の学長の鶴丸俊明先生から置戸町のことを紹介されました。そのような経緯で今年も実施しております。

・カリキュラム上の位置づけ

この「フィールドワーク」という科目は、学科のカリキュラム上は専門科目のなかの「研究法・実習科目」というものに位置づけられております。人間科学科では社会学系の領域と、心理学系の領域と、それから歴史学や民俗学、それから考古学などの文化系の領域という、三つの領域が方法論に関するような研究法の講義や実習を行うような科目を開講しております。社会領域のなかの研究法実習科目としては、「社会調査法」という講義科目と、「フィールドワーク」という実習科目がそれぞれ「研究法・実習科目」として位置づけられています。「フィールドワーク」の方は、実際に現地調査に行く科目ですが、あらかじめ「社会調査法」を履修していないと、履修することが出来ないという積み上げになっています。

講義科目である「社会調査法」の方では、社会調査の基本的な考え方や方法を勉強するわけですが、これは、私が担当をしております。それをふまえて行われる実習科目である「フィールドワーク」の方は、内田先生、湯本先生、私のいずれかが担当をするということになります。「社会調査法」で学んだ方法を、現地調査で実際に試してみるという位置づけになっています。今年度から社会調査士の科目としても認められていまして、「フィールドワーク」の方は最後の実習科目であるG科目というものに位置づけてあります。「社会調査法」は半期2単位の科目ですが、「フィールドワーク」は、元々は通年でやっていた時期もあるのですが、現在は後期4単位という形で授業を運営しています。

さて、2013年、2014年と置戸で2回ほど、実施しましたが、必ず最終的には報告書をまとめるというのが、学生の課題になっています。昨年までは業者に印刷をお願いしておりましたが、今年から学内印刷となりました。できればやや貧弱にはなりましたが、いずれにせよ、報告書の作成までを授業の一環に位置づけています。

・置戸町の人口動態など

今日は、この「フィールドワーク」で、実際にどのようなことをやっているのかということをお話しますが、その前にどんなところなのか、ということをお話してから、中身の方に入っていきたいと思います。国勢調査によると、置戸町は、1980年に6,430人だった人口(高齢化率は10.8%)が、年を追うごとに減少し、2010年では3,428人となっております(高齢化率は38.1%)。このように人口減少が急速に進んでいって、しかも高齢化が急速に進展していっています。もともと、林業で栄えた町だといわれていますが、人口のピークは1955年頃で、高度成長期あたりからどんどん人口の流出が始まって現在に至り

ます。もともと基幹産業は林業と農業でしたが、農業が現在の基幹産業だといってもよろしいかと思えます。

・木工クラフトの地域産品化と生産者の育成制度

こうした町ですが、1980年代から、木工クラフト製品を地域産品化するということと、その生産者を町で育成していくという、独特の取り組みがなされてきました。細かいことは省きますが、町が研修生を募集して、時期によって違いがありますが2～3年くらい、木工の研修を受けさせて、そして生産者になっていく、そういう仕組みです。ものを作る人を作る、そういう仕組みを町のなかで作り出した、そういう地域です。現在は20人ほどの生産者の方がいるのですが、Uターンの方を含めると、外部から移住者が15名ほどおられまして、その意味では、その多くが外から移住してきた人によって担われているという現状です。私としては、とりわけ都市部からの移住というものを経験してきた人々のこれまでの生活形成やライフコース、また新しい町での新たな関係形成の在り方に関心を持っており、そこに家族というものはどう関わってくるのか、そういうところに研究上の着眼があるのですが、大変面白そうだったので、そこに行ってみるといことになりました。

・工房数の推移

1983年からオケクラフトの生産がはじまり、当初は3つの工房で作られていましたが、翌年から研修制度が開始され、その後に独立して生産者となる人が登場してきます。1980年代の中頃から、工房数二桁となり、概ね2000年代以降は20工房前後で推移してきました。

ただ、研修を受け、独立したとしてもやめられてしまう方がけっこうおられたようで

す。町としても、外から入ってきた研修生を町に定着させることが難しかったと言われていて、研修後に独立したものの10年未満で廃業した工房がこれまでに12工房あったりもしました。町としては放っておけば人口は減っていくし、小さな数でも外から人を呼ぶ一つの策として、外部からの移住生産者の育成がおこなわれてきたわけですが、どうやって生産者に定住してもらおうか、そういったことが大きな課題になっていたようで、この育成のシステムも何度か改変を繰り返して、現在に至っています。

現在、私が学生を連れておこなっている調査実習というのは、一つにはこういった研修の制度がどうやって作られてきたのかということ、学生が現地の関係者に聞き取りをするというのが一つ。もう一つは、実際に外から移住をしてきて町の中に入って来て、研修を受けて、独立して、クラフトの生産者として生計を立てていらっしゃる方たちに聞き取りをおこなう、というのがもう一つです。さらにもう一つ捉えるのなら、町の様子を参与観察する。そういった調査実習をここ2年ほどおこなってきました。

・対象地選定の経緯

この町を調査地として選んだ経緯については、さきほど申し上げたように美唄市の時は「食にこだわった町づくり」を市が展開しておりましたので、それを調査するというのをやりましたが、2012年に次の対象地をどこにしようか考えていた時に、ちょうど大学と町が連携協定を結んだということが一つあって、翌年の2013年度からの対象地を検討するにあたり、その後、学長になられた鶴丸俊明先生から、町のことを紹介していただきました。置戸町ではすでに人文学部の人間科学科で考古学実習が発掘の実習をやっている、そのようなこともあってちょっと興味があるから連れて行って下さいとお願いし

て、11月頃に連れて行っていただきました。その際に、オケクラフトセンター森林工芸館にもつれていっていただき、オケクラフトのような取り組みがあって、作っている人の多くは外部からの移住者であるということがわかって、そこでちょっと興味をもちました。

地域産品の開発と生産者育成を町づくりの一環とまずは位置付けました。その上で置戸町は札幌近郊からするとものすごく「田舎」ですが、そういうところに外から入っていてもづくりをする人たち、そういう人たちに着目するような、そのような社会調査を計画したということです。ご存知の方もおられるかと思いますが、札幌でも毎年、作り手の人がやってきて、展示即売会（オケクラフト札幌展）が開催されています。

・経過と現状（2013年度）

さて、授業をどんなふうに進めてきたかということに移りたいと思います。いろいろ調べていくと、この町は社会教育活動に非常に熱心に取り組んでこられた町で、社会調査実習よりもむしろ社会教育主事関係実習などで行っていいのではないかというような、そういう町でもあります。オケクラフトという木工生産というのも、流れとしては社会教育活動の一環として登場してきたという経緯があるようでした。現地の方とお話すると、「生産教育」という表現がしばしば用いられたりもします。そこで社会教育の一環としてのオケクラフトという取り組みが、町のなかでどんなふうに関わり合ってきたのか、というそれを調べてみようという目的設定をして、2013年度はフィールドワークを実施しました。

授業の進め方は後期の科目ですから、9月から10月中旬くらいにかけて対象地とオケクラフトについて、こちらからも資料を提示しつつ、学生自身がいろいろと下調べをおこない、それからe-stat等を使って国勢調査な

どのデータも見ながら、人口、世帯、産業の動向などを調べるなど、それからいくつか参考になるような文献や、ちょうどこの年は平澤先生も行かれていて、報告書などをお分けいただいたりもしましたので、そういったものを参照しながら、どんな町で、どんな取り組みがおこなわれているのか、ということをおおまか程度調べたうえで、実査自体は10月29日から三泊四日で行きました。実査に向けた準備では、調査票の作成などがありますが、厳密な調査票ではなくてチェックリストのようなものです。半構造化インタビューで使用する文書になります。それらに加えて、自炊での生活になりますから、班を作って食事の献立などもあらかじめ考えてと、もろもろ準備作業をして現地調査に臨みました。

この年の現地調査は三泊四日で、非常に交通の便の悪いところでもあるのですが、往復の交通手段はSGUバスです。大学から片道4、5時間かけて移動します。現地にちょうど良い宿泊施設がないものだから、町の中央公民館をお借りして、貸布団をレンタルし、自炊をしました。公民館にはお風呂も無いので、隣接する体育館のシャワーをお借りするという形で、町にあるさまざまな施設をお借りして、実習をおこないました。北見と陸別をつなぐ路線バスは、一応は通っているのですが、町内の全域に行けるわけではなく、交通手段が乏しいため、徒歩で移動が可能な範囲に限定してこの年は調査を実施しました。オケクラフトセンター森林工芸館の館長さんからレクチャーを受けることと、生産者の工房をたずねてインタビューを実施することが主なメニューでした。それからせっかく木工の町にきたので、バターナイフを作るというワークショップを開いていただいたりもしました。最終的には最終日の午前中に現地での報告会をおこなって、現地の方々とやりとりをして帰ってくる。そういう

ような調査です。現地ではオケクラフトの器をお借りして、自分たちで作った食事をそれによそって食べるなどということもしました。

戻ってきてからは、データの整理等をおこなって、それをどのようにまとめていくのか、ということをも学生同士が詰めていき、最終的には報告書の原稿を提出して終わるとそういう科目です。

・経過と現状（2014年度）

昨年は「移住」をテーマにして、移住生産者といえるような人たちを対象にしたインタビュー調査をメインに現地調査を実施しました。大体、9月からの授業の進め方自体はその前の年度と概ね同じです。現地調査も概ね同じなのですが、置戸町の中心部から10キロくらい離れた奥にある集落のほうにも、路線バスを利用して調査に行くということも、この年度は実施しました。主に実際の工房に伺って、東京や関西という都市部から移住してこられた方々を対象として、学生がインタビューしてまわるという、そういう調査をしました。昨年、一昨年はいずれも履修学生が12名ずついたのですが、基本的には12名全員で一緒に動くという形で、お邪魔をさせていただき、そういう進め方をしておりました。

・経過と現状（2015年度）

さて、3年間くらいやらせてくださいとお願いして、今年が3年目になるのですが、いろいろと浮き沈みがあって、町の研修制度も休止したり、再開したりしてきたのですが、しばらくの間休止されていたものが今年は再開されました。そこで新しい研修制度はどういうものなのかということをも明らかにすることと、さっそく研修生が今年から3人ほど来られているので、その方々にお話をお聞きしたうえで町の魅力というものを探る、そういう目的を履修学生が主体となっている

いろと検討しているところですが、こうした目的設定で調査を実施する予定です。

それから今年は、開町100年の節目の年を現地では迎えるということで、われわれはちょうど来週行くのですが、そのタイミングで100周年のイベントが開催されます。人口3,000人くらいの町ですが、どうやら800人くらいの人々が集まるイベントとなるようで、そのような「100周年イベント」がおこなわれる町がどんな様子なのか、それを参与観察するというのが今年のもう一つの調査課題になっています。

そして、戻ってきてからはデータの整理をして、報告書をまとめていくことになるかと思えます。今年は、内田先生と私でこの科目を担当しているのですが、フィールドを二つに分けたこともあって、それぞれの受け持ちの学生数が少なくなりました。そこで私の方の実習は、わたしが担当する専門ゼミの合宿とジョイントする形で学生を連れていく、そういう形で現在準備を進めています。

100周年イベントの会場となるため、これまで宿泊させていただいてきた公民館は借りることが出来なかったのですが、今年はこれまでとは違って北見に宿をとって、そこから1時間くらいかかるのですが、毎日路線バスで往復することになります。現地での調査は実質的には2日間の日程になる、そんな予定です。

・設営と担当者による調査研究の同時進行

このような実習をしていますが、実際にこれを進行させていくためにはかなりの根回しというか、下準備が必要です。2013年はその年の夏から依頼をして、何度か打ち合わせにも赴いて、秋に現地調査を実施したのですが、なかなか「フィールドワーク」の学生の実習だけをお願いするというのは難しいものがあって、私自身が関心を持ったフィールドで

もありましたから、まず私自身が調査をさせていただきます、というお願いをしました。実際に全部で20人ほどの生産者の方がおられるのですが、オケクラフトセンターが窓口になってくださって、生産者の方を紹介していただきました。そうして、私が自分の研究のための調査の依頼もかねて「フィールドワーク」の打ち合わせに行きつつ、途中からは調査を行うということも同時に進行させながら、この年は実習を実施してきました。ですから、2013年度は7回現地を訪問しました。この年は、オケクラフト30周年の記念行事も開催され、ちょうど学生を実習で連れて行って帰った後に開催されましたが、わたし自身の調査の一環として、それにもうかがったりしました。

翌年も実習をやったわけですが、同時進行で私自身のインタビュー調査も進めていきました。依頼して調査をするというサイクルでなんども現地を訪れ、そこにぼんと、11月くらいに学生を連れていく実習が入るといって、そういう形で2014年度は8回訪問しました。本年度はまだ2回しか行っていませんが、同じようなサイクルで進めてきました。

そういったなかで現在20工房あるうち、14工房の生産者に調査を実施することが出来て、行くたびにいろいろやり取りする方はたくさんいるのですが、現在も残る工房について私個人の方の調査が進行中です。夏場の調査では、自転車を持ち込んで、工房を回ったりするのが楽しみのひとつとなりつつありますが、なかなかハードな調査です。ただ、ちょっとこれくらいやらないと、なかなか新規のフィールド開拓というのは難しかったのかもしれない、とそういうような話もあります。

・課題：調査と交流のバランス

そろそろまとめますが、いくつか難しいなと思うことを課題として掲げていきます。ま

ずは、「調査と交流のバランス」です。学生の調査という側面と、地域との交流というもののバランスがなかなか難しいと感じています。出来るだけ地域の人々と交流する機会を多く持たせたいのですが、体験学習で終わるわけにもいきません。報告書をまとめるような調査実習でもありますし、本年度からは社会調査士のカリキュラムとしても運用しています。ですので、その配分がなかなかやってみましたが難しい。今でも良い落としどころがわからない中で、手探りで進めているところがあります。

次に「研究と教育のバランス」です。実習としてのプログラムを実施するにあたっては、やはりそれなりに教員の側で、対象地のことを把握しておくことが当然必要となりますけれども、今回の場合は、私が自分の研究課題にしてしまうことで、何とか対応することが出来たのではないかと思います。

さらに、「学生の経済的負担」も課題です。学生の経済的な負担を出来るだけ抑えてあげたいと思うのですが、「フィールドワーク」という科目では一律に18,000円の実習費が徴収されています。もう少し何か大学からの経済的なサポートがあればいいなと思いつつながら、ずっと進めているところであります。

それから、「現地へのフィードバック」についてです。報告書を作って持っていくというところまではやっているのですが、もう少し教育の成果だけではなくて、研究の成果を還元するということが必要であると痛感しています。私自身が論文等にしておくことが求められますが、これはできるだけ早くなんとか形にしたいと考えています。とても遠いところにあって行き難いところで、なかなか足しげく通うことが難しいところではあるわけですが、もう少したくさんの学生と一緒に現地に行って、現地の人々と関わる機会みたいなものを作り出せれば、対象地域に対しても還元出来るものがもう少し増えるのかな、と思い

ながら、試行錯誤しながら3年目に入る、そんなような実習を続けております。

さいごに、昨年度の報告書なのですが、きれいに作ったのですが学内印刷だとどうしても見栄えが良くない。事務方に「なんとかならないのですか」と聞いたら、「なりません」と言われましたが、その辺も課題と言えば、課題かなというふうに思っております(笑)。以上です。

大國：ありがとうございます。簡単な質問等がございましたら、よろしくお願ひします。

佐藤：簡単な質問ですが、11月というのは寒いのですか？

木戸：はい。とても寒いです。それほど雪深いところではないですが、陸別の隣なので相当寒いです。

桜井：バスの運転は誰がするのですか。

木戸：バスは、SGUバスですので、運転手付きです。

森田：自身の研究テーマが家族社会学ということで、その研究テーマ意識としても携わったということですよ。具体的に置戸町の調査で家族社会学からして、どのような問題意識、課題意識があったのかなということと、それが学生を調査報告書とか指導するときに、なにかしら反映されているのかということをお伺いしたいのですが。

木戸：例えばですが、いろいろな方が移住さ

れてはいますが、現地に移住してきて、結婚して子どもを持ってというケースは1ケースしかありません。それも実際に子どもを持たれるまでに、10年くらい時間がかかっているのです。つまり、生活していくのが結構、厳しいのです。夫婦のみで来られている方が結構いて、そういう方々は奥さんも現地でパートの仕事か何かがあって、まあ、自分達だけでやっていくには十分だと言うのですが。だから、町の側の受け入れ方として、入っていた人が普通の生活が出来るような体制が整えられているのか、と考えると、結構厳しいところがあるのだらうな、というところがあって、完全にシングルの方もいらっしゃるものですね。いろいろな方がいるので、どういう家族的背景を持った方が、どういう経緯で入ってきたのか、というあたりを学生にはインタビューで聞くように指導もしていくわけですが、そんなにそこに注目した考察を学生はしてくれませんけれど、一応、そういうような狙いもあって、そういった方々を対象としたインタビューと、そういった方々を受け入れている側の仕組みの在り方を調査させているということですよ。

大國：よろしいでしょうか。木戸先生、ありがとうございます。